

ウマオイと機織り

2021/09/11



おはようございます。先日、名古屋モーツァルト協会の会員で、日頃、ご尊敬申し上げる偉大な経済学の先生から、「この季節、長塚節の歌『馬追虫（うまおひ）の髭のそよりに来る秋はまなこを閉ぢて想（おも）ひ見るべし』を思い出します」というメールをいただきました。

9月は、いつともなく、秋が静かに忍び寄ってくる気配を感じさせる、なんとも繊細で微妙な季節です。この季節の自然な移りゆきを、小説家の長塚節をはじめとする歌人たち日本人は、大切にします。その思いを、「ギリギリス（馬追虫）の細いヒゲ」という小さな虫の繊細で微妙な感覚器官にまかせて描いた、感性に富んだ、なんとも良い歌です。いま、この日本での、夏からの秋へかけてのかそけき移ろいは、目を閉じて、身体で、そよりに感じてこそ、初めて分かるのです。「ウマオイ」はまた、「機織り」（はたおり）とも申しました。わたしたちは、その鳴き声に、秋を感じます。

『十訓抄』（じっきんしょう）という説話集に、源有仁（みなもとのありひと）という大臣に仕えていた下級の侍のお話が載っています。

大臣が秋のある夜、家来や女官を集めて虫を聞く会を開きました。夜も更けて、格子を降ろしに来た下級の武士に、「お前の特技は歌を詠むとのことだが、この機織り虫について一首、詠むがいい」と命じました。そこで侍が「あおやぎの～」と詠い出すと一座はドッと笑いました。秋なのに、春の風物の青柳を持ち出したからです。しかし詩歌に通じていた大臣は侍につづけるよう促しました。「あおやぎの、みどりの糸をくりおきて、夏へて秋は、機織りぞ鳴く」。「機織りは、春に青柳の糸を繰って（つむいで）おいて、夏が過ぎ、秋が来た今、やっとなを織るので、いまその音が聞こえてくるのです」というのです。大臣は大いに感動して、侍に萩の模様を織った立派な衣を与えました。

みなさまも、お健やかに過ごして下さい。

都築正道